

いつから私たちはアジア市民になったのか

京都学園大学 堀田穰

かつて、「ベトナムに平和を！」市民連合という運動が1960年代末から1970年初にかけて展開した。当時私は高校生だったが、全面的ではないにせよ、その運動に参加した覚えがある。組織でなく、勝手に集まればよい、できることをする、など、直接行動主義、ネットワーク主義と呼ばれる、今日に通じる行動形態のモデルを示していたと評価できる。ベトナム戦争の悲惨さが伝えられ、何とかしなくてはと考えたさまざまな人々が集まった。ベトナムに出かければ死ぬことがわかっていた米兵たちが軍隊を脱走する手助けまで、この運動は行っていた。しかし、それでも、アメリカに打ち勝ったのは反戦運動ではなく、北ベトナム軍であった。その後、ベトナム難民は日本まで流れ着いた。今も日本で暮らすベトナム難民は存在している。

そのうち、というか、それとは関係無く、ラオスに紙芝居を普及する活動をしている長野さん、やべさんらに会って、2002、2003年とラオスに出かけた。今年、バンコクからビエンチャンに向かう飛行機の中で、隣の席のNGO「ラオスの子ども」代表のチャンタソンさんから、国道13号線で路線バスや通行車が銃撃され、9人が殺されたことを聞いた。外務省海外安全情報によるとその後も3回ほど銃撃事件があり、さらにたくさんの人が殺されているらしい。もちろん、誤解されては困るので言うておくが、ラオス人は親日的であり、ラオスの日常は平穏そのものである。

けれども、この事件はベトナム戦争の後遺症ということができる。北ベトナム軍の補給路、ホーチミンルートがラオス国内を通り、それを米軍が爆撃し、また、中国雲南省からインドシナ半島の山岳部に住む少数民族モン族を、北ベトナムに対するゲリラに仕立て、アメリカ敗北の際、虐殺を避けて大量にアメリカに移民させたことなど、公式記録にはまだないにせよ、機密ではなく、私のような普通の者の耳にも入っている。その恨みつらみがまだ残っている。

そして、カンボジア動乱である。一つの国を政府の代わりに国連が治めるという、歴史上例がない国連暫定統治機構（アンターク）は、日本人を代表にし、また、民主的選挙の際に日本人ボランティア二人の命が失われたことなどは、ついこの間、1990年代のことであった。

ラオスに紙芝居を普及する活動に関わってから、もう一度改めて東南アジアの戦乱の現代史を振り返ることになった。日本のNGOがいつから東南アジアで活動を始めたのか、どんな活動だったのかを調べてみた。大きな活動は仏教の曹洞宗の国際ボランティア活動がはじまりだったようだ。曹洞宗報1980年8月号付録「カンボディア難民救済6ヶ月の歩み」には、その未知の経験への生々しい印象が語られている。それは1979年から始まっていた。「救援に乗り出せば、その活動の困難さは宗門を苦しめることになるに相違ない。何故なら、海外でのボランティア活動は全く未知の世界であり、それを維持するには全国的な募金に依存せざるをえないからである。

さればとて、これを看過すれば、宗教者として罪の意識にも似た後悔の念に生涯苦しめられるであろうことも確かである。このような二者択一の決断を迫られた形で調査団はサケオ難民キャンプを訪れたのであった。

そして、そこで我々が見たもの、それは絵巻物の餓鬼草子さながらの地獄絵であった。」この時の調査報告が、現在にいたるまでの日本のNGOの東南アジアでの活動を規定している。そしてまた、1970年代の日本の反戦運動と一線を画していることも読み取れる。

- 「1. 現状における緊急を要する援助は、食糧医療、衛生環境の整備、そして、その次に教育的、精神的援助活動である。
2. 前項の物質的援助活動は、最重要とはいえ、民間の力をしては限界があり、国際機関によって行われ、その支援活動も軌道に乗って来たと判断されるので、教育支援活動をこそ宗門は最優先すべきである。特に、幼少年を対象として行うべきである。
3. 難民の中のコミュニストを除いて、90%以上が熱心な仏教徒であり、小乗と大乘の相違があるとはいえ、仏教徒なればこそその救援の方法がある筈である。」

国家の力に対して、民間の力の限界を自覚しつつ、持てる力を最大限に生かせるのは教育支援だと考え、絵本の読み聞かせ、紙芝居、ストーリーテリングを中心にした図書館活動を今日まで続け、効果を上げている。

特に興味深いのは3. の記述であり、1970年の日本の反戦運動を担ったのが、親コミュニスト的心情を持った人々であったのに比して、おそらくそういう先端的な立場から見たら保守反動と見られていた仏教徒から、市民的な活動が起こったことである。70年の「ベトナムに平和を！」市民連合の際、実はまだ市民は日本社会に生まれておらず、80年にこそ、アジア市民と言って良い活動が、むしろ後衛の方から起こったと考えられよう。曹洞宗国際ボランティア会に一貫してかわり、現在のシャンティ国際ボランティア会まで育て上げた故有馬実成氏も、山口のいわば田舎寺の住職であったのだ。彼は阪神大震災の1995年がボランティア元年だといわれるが、国際ボランティア活動元年は1980年だと発言していた。

ラオスでの教育支援活動には、現在シャンティ国際ボランティア会ばかりでなく、NGO「ラオスの子ども」が加わっている。代表のチャンタソンさんは1974年に日本に留学し、1982年に「ラオスの子ども」の前身「ASPB ラオスの子どもに絵本を送る会」を設立、その活動により第五回アジア女性・人権特別賞をアジア人権財団から受けた。日本人と結婚し、日本に在住する彼女の、ラオスの子どもや女性たちへの熱い思いと活動がなければ、紙芝居普及も存在しなかっただろうとやべさんは言っている。

2003年1月、JAICAの資金援助で、ASPBはおそらく世界で初めての日本人以外、日本語以外の紙芝居入門書を発行した。ラオス語で書いたのはブンルートさん。1993年日本からラオスに紙芝居が渡って以来、紙芝居セミナーにずっと参加しつづけてきた人である。現在はラオス国内に紙芝居を普及することを自らの仕事にしており、ラオスの紙芝居は今後も、この人が率いていくことになるだろう。

日本NGOの東南アジアでの活動は、その方法、内容からしてもユニークなものであり、もっと評価されて良いと考える。しかし、ラオスの銃撃事件の報道を見ても、外務省情報以外には日本社会には伝わっていない。我が国だけがそうなのかは知らないが、人々を引っ張っていると思っている知識人、ジャーナリストたちが、いつのまにか引っ張られていると思われる人々乗り越えられていってしまうのだ。この種の仕事は、いつもそうなのかも知れない。自分のやれることを、やれるだけ、こつこつと積み重ねていく姿勢が大事なのだから。アジア市民として、アジアの子どもたちの笑顔だけが、そのような地道な仕事の報いになるだけなのだから。